

## 包括的な文書：聖書のみに基づく福音派キリスト教と新約聖書 キリスト教の矛盾

福音派教会は、プロテスタントキリスト教における広範な現代的運動として、個人の回心、聖書の権威、伝道、そしてしばしば聖書の保守的な解釈を重視します。20世紀にリバイバル、宣教、そして近代主義への対応を通して顕著に台頭した福音派教会は、個人の信仰体験、教義の純粹さ、そして文化への関与を優先します。しかし、黙示録2章から3章で取り上げられている7つの教会と比較すると、福音派教会はラオデキヤの教会（黙示録3章14-22節）に最もよく似ています。この比較は聖書の記述のみに基づいており、霊的な状態と警告における類似点を強調しています。

ラオデキヤ教会は「ぬるま湯のようで、熱くもなく冷たくもない」（黙示録3:16）と描写され、自己満足に浸り、「私は富んでいる。財産を築き、何も不足していない」（黙示録3:17）と主張しています。しかし、イエスはそれを「惨めで、哀れで、貧しく、盲目で、裸である」と叱責し、「火で精錬された金」（真の霊的富）、「着る白い衣」（義）、「目に塗る軟膏」（識別力）を買うように促します。これは、現代の福音主義が陥りがちな落とし穴の側面を反映しています。物質的な成功、大規模な教会、プログラムの成長に焦点を当てることで、霊的な生ぬるさ、キリストへの依存よりも自己依存、そして見かけ上の繁栄の中でより深いニーズに気づかないといったことが起こり得るのです。ラオデキヤのように、福音派は外的な活動（例えば、イベントやメディア）を重視するあまり、内面的な停滞を招く恐れがある。これは、イエスが「真剣に悔い改めなさい」（黙示録3:19）と呼びかけ、親密な交わりへの扉を開く（黙示録3:20）ように促したことを想起させる。この比較は、非難ではなく、聖書的な警告として機能し、福音派に新約聖書が求める熱心で謙遜な信仰に耳を傾けるよう促している。

本稿では、福音主義の特定の慣習、構造、重点が、新約聖書に記述されている初期教会のモデルとどのように異なっているかを考察する。福音主義は聖書に沿うことを目指しているものの、歴史的・文化的発展によって、新約聖書のパターンとは対照的な要素がもたらされてきた。分析はテーマ別に構成され、明確化のために小項目が設けられ、聖書からの直接的な引用によって裏付けられている。

## 1. 教会のリーダーシップと権威：階層的な専門職主義 vs. 複数の聖霊に満たされた長老制

福音派教会は、一人の主任牧師、神学校で訓練を受けた専門家、そして有給の職員からなるトップダウン型の組織構造を特徴とすることが多く、権威が中央集権化されることで聖職者と信徒の間に隔たりが生じる。

- 新約聖書との対比：新約聖書は、各教会に複数の長老（監督）を配置し、正式な学歴や肩書きではなく、人格と成熟度に基づいて選出することで、共同指導体制を推奨しています。テトス 1 章 5 節では、「各町に長老を任命しなさい」と複数形で命じています。使徒 14 章 23 節には、「彼らは各教会に長老を任命した」と記されています。テモテ第一 3 章 1-7 節とテトス 1 章 6-9 節では、「非難されるべき点がないこと」、家庭をうまく管理できること、もてなしの心があることなどが資格として強調されており、学歴については触れられていません。この平等主義的なモデルは、ペテロ第一 5 章 3 節で警告されているように、「あなたがたに委ねられた人々を支配するのではなく、群れの模範となりなさい」というように、他者を支配することを避けるものです。
- さらなる相違点：福音派は、著名な牧師や教団の階層構造を重視する傾向があり、マタイによる福音書 20 章 25-28 節にあるイエスの教えに反する。「あなたがたも知っているように、異邦人の支配者たちは彼らを支配している。…あなたがたの間ではそうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、仕える者とならなければならない。」
- 示唆されること：これは、新約聖書のヨハネの手紙三 9-10 章のような批判書に見られるように、無制限の権力につながる可能性がある。そこでは、ディオトレフェスが支配権を握り、反対者を追放している。

## 2. 教会の集まり：パフォーマンス重視の礼拝 vs. 双方向的で全会員参加型の礼拝

現代の福音派の礼拝は、受動的な聴衆、プロの音楽家、台本通りの説教など、コンサートや講演会に似ており、自発的な発言は制限されていることが多い。

- 新約聖書との対比：集会は参加型であり、すべての信者が互いの霊的成長のために貢献していました。コリント人への手紙第一 14 章 26 節には、「あなたがたが集まる時、それぞれが賛美歌、教えの言葉、啓示、異言、あるいは解釈を持っています。すべては教会が建て上げられる

ためであればなりません」とあります。コロサイ人への手紙 3 章 16 節には、「キリストの言葉あなたがたの中に豊かに宿らせ、詩篇、賛美歌、霊の歌を通して、あらゆる知恵をもって互いに教え合い、戒め合いなさい」と勧めています。

- さらなる相違点：新約聖書には対話や質問が含まれており、使徒言行録 20 章 7 節ではパウロが議論形式（ギリシャ語：*dialogomai*）で「延々と語り続けた」。これは福音派の一方的なコミュニケーションとは対照的であり、マタイによる福音書 23 章 8-10 節でイエスが階層的な肩書きを非難した言葉「しかし、あなたがたは『ラビ』と呼ばれてはならない。あなたがたには一人の教師しかおらず、あなたがたは皆兄弟だからである」を彷彿とさせる。
- 示唆：受動的な形式は霊的な賜物を阻害する可能性があり、これはエペソ 4 章 11-16 節で、訓練を受けた聖徒たちが体の成長のために奉仕の働きをするという教えに反する。

### 3. 救いと弟子道：個人主義的な「罪人の祈り」中心主義 vs. 共同体的な洗礼と継続的な生活

福音派は、救いを求めるための瞬間的な個人的決断や祈りを重視し、それはしばしば共同体から切り離された形で行われる。

- 新約聖書の対比：救いは、即時の洗礼とキリストの体への統合を伴う。使徒行伝 2 章 38-41 節は、悔い改め、洗礼、聖霊の受給を、新しい信者が交わりに加わることと結びつけている（使徒行伝 2 章 42-47 節：「彼らは使徒たちの教えと交わり、パンを裂くことと祈りに専念していた…信者たちは皆一緒にいた」）。ローマ人への手紙 6 章 3-4 節は、洗礼をキリストの死と復活との一致として描いている。
- さらなる相違点：新約聖書は、孤立した経験ではなく、継続的な共同体的な弟子訓練を強調しています。ヘブライ人への手紙 10 章 24-25 節は集会を怠ることを戒め、ガラテヤ人への手紙 6 章 2 節は互いの重荷を負い合うよう命じています。これは、ヤコブの手紙 5 章 16 節にあるように、「互いに罪を告白し合い、互いのために祈りなさい」という責任感を軽視しがちな福音主義的な個人主義とは対照的です。
- 示唆されること：救いを祈りだけに矮小化することは、第二コリント 5 章 17 節にある「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者である」という新約聖書の包括的な変革を無視することになる。

## 4. 霊的賜物と聖霊の役割：終止論または制限 vs. 積極的な追求と実践

多くの福音派信者は、カリスマ的な賜物を使徒時代や個人的な使用に限定したり、あるいはその継続を否定したりする。

- 新約聖書との対比：賜物はすべての信者のためのものであり、継続的な霊的成長の糧です。コリント人への手紙第一 12:4-11 では、さまざまな賜物（知恵、知識、信仰、癒し、奇跡、預言、異言）が「共通の益のため」に列挙されています。コリント人への手紙第一 14:1 では、「愛の道を歩み、御霊の賜物、特に預言を熱心に求めなさい」と勧め、14:39 では「異言を語ることを禁じてはなりません」と付け加えています。預言は特に、力づけ、励まし、慰めのための御霊による啓示であり（コリント人への手紙第一 14:3）、教えとは区別され、集会での自発的な表現に開かれています（コリント人への手紙第一 14:29-30）。
- さらなる相違点：聖霊のバプテスマは回心後の明確な力づけであり（使徒 8:14-17、19:1-6）、福音派が回心と聖霊の満たしを同一視することとは矛盾する。ローマ 12:6-8 は賜物を相応に用いることを奨励しており、預言には識別力が必要である（テサロニケ第一 5:19-21：「御霊を消してはなりません。預言を軽んじてはなりません。すべてを吟味しなさい」）。
- 示唆：抑制は身体機能を阻害するが、これは新約聖書がすべての信者に預言などの賜物を追求し行使するよう求めていることに反する。

## 5. 信仰と行い：「信仰のみ」の過度な強調 vs. 行いによって示される統合された信仰

福音派は、宗教改革の神学に由来する考え方から、信仰と行いを切り離し、後者を単なる証拠とみなすことが多い。

- 新約聖書における対比：信仰と行いは切り離せない。ヤコブの手紙 2 章 17-26 節は、「行いが伴わない信仰は、それだけでは死んだものである。人は行いによって義と認められるのであって、信仰のみによって義と認められるのではない」と述べている。マタイによる福音書 7 章 21 節は、「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、わたしの父の御心を行う者だけが入るのである」と警告している。
- さらなる相違点：裁きには行いも含まれる（ローマ 2:6-8：神は「各人にその行いに応じて報いる」；黙示録 20:12-13：彼らは「行ったことに応じて」裁かれる）。これはエペソ 2:8-10：恵みによって救われ、善行を行うという教えと釣り合っている。

- 示唆：行いを軽視することは、ヨハネによる福音書 14 章 15 節の「もしあなたがたがわたしを愛するなら、わたしの戒めを守りなさい」に反する、反律法主義のリスクを伴う。

## 6. 聖書の解釈と権威：厳格な無謬説対キリスト中心の漸進的啓示

福音派はしばしば聖書の無謬性を全面的に主張し、新約聖書が成就したことを認めずに旧約聖書と新約聖書を同等に扱う。

- 新約聖書との対比：イエスは旧約聖書を段階的に再解釈した。マタイによる福音書 5 章 17-48 節は律法を成就し、命令を高めた（例えば、「あなたがたはこう言われているのを聞いたことがあるが、わたしはあなたがたに言う」）。ヘブライ人への手紙 7 章 18-19 節は、以前の規定を「弱く無益なもの」と宣言し、より良い希望を提示した。
- さらなる相違点：新約聖書は文字と霊を対比させている（コリント第二 3:6：「文字は人を殺し、霊は命を与える」）。ガラテヤ 3:23-25 では、律法はキリストが現れるまでの守護者とみなされている。
- 示唆：進歩を無視すると、律法主義に陥る可能性があり、コロサイ人への手紙 2 章 16-17 節「キリストを指し示す影」に反する。

## 7. 誤りと分裂への対応：教会を転々とすることや分裂か、それとも忍耐強い論争と一致か

福音派は意見の相違から分裂したり離脱したりして、新たなグループを形成することがよくある。

- 新約聖書の対比：忍耐をもって内なる問題に取り組む。黙示録 2 章と 3 章は欠陥のある教会を批判しているが、同時に内部での悔い改めを求めている（例えば、テアテラはイゼベルを容認しながらも、その愛ゆえに称賛されている）。ユダ 3 節は信仰のために戦うことを促し、テモテ第二 2 章 24-25 節は穏やかな矯正を指示している。
- さらなる相違点：一致が最優先事項である（ヨハネ 17:20-23：「彼らが一つとなるため」）。エペソ 4:3：「御霊の一致を保つよう努めなさい。」
- 示唆：分裂はフィリピの信徒への手紙 1 章 27 節の「信仰のために一致して戦いなさい」という教えに反する。

## 8. 宣教と福音の宣言：個人伝道に焦点を当てる vs. 包括的な神の国の発展

福音派は魂の救済と天国への到達というメッセージを優先し、社会正義を軽視しがちである。

- 新約聖書との対比：イエスは神の国を包括的に告げ知らせている（マルコ 1:15：「神の国は近づいた」）。ルカ 4:18-19 には、貧しい人々への良き知らせ、囚人の解放、盲人の視力回復などが含まれている。
- さらなる相違点：使徒行伝 4 章 32-35 節は経済的な分かち合いを示しており、ヤコブの手紙 1 章 27 節は宗教を孤児や寡婦の世話をすることと定義している。
- 示唆：狭い視野では、マタイによる福音書 25 章 31-46 節「慈悲の行いによる裁き」を見落としてしまう。

## 9. 富と繁栄：物質主義の容認 vs. 富に対する警告

福音派の中には、繁栄の神学や富による安らぎを信じる者もいる。

- 新約聖書との対比：イエスは富の危険性について警告している（マタイ 19:23-24：金持ちが神の国に入るのは難しい。テモテ第一 6:9-10：金銭を愛することは悪の根源である）。
- さらなる相違点：使徒行伝 2 章 44-45 節：信者たちは困窮者を助けるために持ち物を売った。
- 示唆：自己満足はラオデキヤの自給自足（黙示録 3:17）を彷彿とさせる。

## 10. 終末論：患難前携拳の強調 vs. 患難期を耐え忍ぶこと

福音派はしばしば、苦難からの脱出を教える。

- 新約聖書との対比：信者は試練に耐える（マタイ 24:29-31：苦難の後の集結、黙示録 7:14：大いなる苦難からの聖徒たち）。
- さらなる相違点：テサロニケ第二 2:1-3：背教と不法の者が現れるまで集会は行われない。
- 示唆：現実逃避は忍耐力を阻害する（ヤコブ 1:12）。

## 11. 政治への関与：権力との同盟か、王国の分離か

福音派は政治的影響力を求めることがある。

- 新約聖書との対比：イエスの王国は「この世のものではない」（ヨハネ 18:36）。ローマ 13:1-7 は権威に従うが、神を最優先する（使徒 5:29）。
- さらなる相違点：コリント第二 6:14-17：不信者と軛を共にしてはならない。
- 示唆：妥協は偶像崇拜のリスクを伴う（黙示録 13 章の警告）。

この再編集された文書は、共同体、聖霊への依存（明確化された預言的賜物を含む）、そして包括的な従順という新約聖書の優先事項を強調し、それらに沿うための内省を促している。